

(第3種郵便物認可)

# 釜ヶ崎の赤いげ先生

本田良寛先生

(1)

動を契機に地区対策が実とが「四成」と呼んでいるを得ない。ある時払いの催促なし額診断医療施設。保険未加入など社会的・経済的理由から、必要な医療を受けられない日雇い労働者・高齢者のために、公的機関から依頼があれば治療費の一部または全額を、金銭的余裕ができるまで貸し付ける独自の制度がある。良寛先生は大阪市、大阪府など行政と粘り強く交渉し、この制度をつくった。

同センターは、無料低額診断医療施設。保険未加入など社会的・経済的理由から、必要な医療を受けられない日雇い労働者・高齢者のために、公的機関から依頼があれば治療費の一部または全額を、金銭的余裕ができるまで貸し付ける独自の制度がある。良寛先生は大阪市、大阪府など行政と粘り強く交渉し、この制度をつくった。

同センター付属病院で、良寛先生の下で定年退職まで務めた元総務課長、中平文也さん。医療法人「紀和会」事務局長は「(治療費が払えない労働者に対して)本田先生は施しはいかん。今、金がないんですよ。今、金はないけどまた働いてお金ができれば返すに來たらええねんと。上から目線で物を言わないというのが、本田先生の一つの理念であったのかなと思います」と回想する。

良寛先生は、患者と同じ目線に立つためには「これやないとかかんねん」と言って作業スポンをばき、院長として病院運営と公衆衛生の面でも先進的な医療活動を展開することに。

(大山勝男)

## 上から目線は絶対あかん

大阪市西成区の通称「釜ヶ崎」(あいりん地区)。この地域で健康を損なった日雇い労働者の診療に、日夜奮闘した本田良寛医師は、大阪社会医療センターの初代院長を務め、労働者からは親しみを込めて「良寛先生」と呼ばれた。医療費はある時払いの催促なしで、一身体を治すほうが先や。治療費は病気が治って働き始めてからでええ」が口癖だった。釜ヶ崎の医療に一生をささげ、胃がんのため60歳で亡くなった良寛先生の生き方を追った。

### 日雇い労働者のまち

西成区の北部、JR新今宮駅の南側に位置する簡易宿所・寄せ場が集中する地区は、通称「釜ヶ崎」と呼ばれる。東京の山谷、横浜の寿町とともに、日本の三大日雇い労働者の拠点として、日本経済を底辺で支えてきた。

釜ヶ崎地区は、ほぼ800㎡四方に過ぎない小さな面積に、簡易宿泊所

### 釜の地域医療の道へ



院長室の良寛先生

現在では老朽化が目立つ大阪社会医療センター付属病院(6階から7階部分)

同センター付属病院で、良寛先生の下で定年退職まで務めた元総務課長、中平文也さん。医療法人「紀和会」事務局長は「(治療費が払えない労働者に対して)本田先生は施しはいかん。今、金がないんですよ。今、金はないけどまた働いてお金ができれば返すに來たらええねんと。上から目線で物を言わないというのが、本田先生の一つの理念であったのかなと思います」と回想する。

良寛先生は、患者と同じ目線に立つためには「これやないとかかんねん」と言って作業スポンをばき、院長として病院運営と公衆衛生の面でも先進的な医療活動を展開することに。

(大山勝男)

現在では老朽化が目立つ大阪社会医療センター付属病院(6階から7階部分)